オラーシャ奪還（旧版）

雑用長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オラーシャ奪還（旧版）

【Ｎコード】
Ｎ１８９７Ｌ

【作者名】
雑用長

【あらすじ】
※こちらは二度と更新しません。旧版です。新版→「Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ Ｗｉｔｃｈｅｓ ＴＨＥ ＯＲＵＳＳＩＡ ＷＡＲ」を見てください。

Prologue

欧州での戦が終わりを告げる頃、つまりは１９４５年の春。

ネウロイは相次いで太平洋に出現、南方の連合各国や扶桑南方領土たるマリアナ諸島、小笠原諸島、沖縄が陥落し、各地でネウロイによる大規模な空襲が発生した。

太い平洋戦線でのこの戦いは、同年夏、広島、長崎に追い詰められたネウロイの自爆により終結する…が、しかし。

それで第二次ネウロイ大戦が終わった訳ではなかった。

千島・樺太で生き残っていた太平洋戦線の敗残ネウロイたちは、増殖しながらシベリアの人気の無い所を選んで西へ西へと進み、ウラルを越えてヨーロッパオラーシャに踏みこんできたのだ。

平和に酔いしれていた町は、ネウロイを前にして為す術もなく陥落。ヨーロッパオラーシャは全域に渡って占領されることに為ってしまった。

これに対し、オラーシャ開放時に独立していったオラーシャ属国の東欧、北欧諸国や、スオムス、バルトランド、オストマルクなどに散らばったオラーシャ亡命政府は各国に支援を要請。再び、欧州の地に各国の兵が集決することになる。

これに伴い連合軍は、アフリカの第３１統合戦闘飛行隊の空陸共同部隊の成功の例に倣い、第５０１統合戦闘航空団に機械化陸戦歩兵を加えた統合戦闘混成団を結成することになった。

そして１９４５年、冬。
長過ぎた戦いを終わらせる為の最後の戦いが、始まろうとしていた。

０１　第５１１統合戦闘混成団

８月１５日に太平洋戦争終結し、９月２日に扶桑全土のネウロイの掃討が終了…そして、戦闘開始から３ヶ月、１９４５年１２月１日。オラーシャの東部戦線では、両者睨み合いの膠着状態が続いていた。何時戦闘が起こるとも解らない緊迫した状態の中、時々起こる小競り合いに、軍人達は皆ピリピリしている、そんな戦線。そしてその最前線であるオラーシャとの国境の程近く、ヴィロフティ航空基地には現在、４人の魔女が駐屯していた。

「今日も静かですね、ネウロイ。」
深々と降り積もる雪を眺めながら、クリスティアーネ・バルクホルンは呟いた。
昏睡状態から目覚め、リハビリを終えて完治した時彼女が選んだ道は、慕い、憧れた姉と同じ道を歩むこと…機械化航空歩兵になることだった。
ＪＧ５２に配属され、ベテランパイロット達直伝の空戦技術を学び…この東欧の地に再結成された第５０１統合戦闘航空団に着任したのである。
「それにこしたことは無いだろ？」
応じたのは、ソファーに深々と座り、暖炉の火に向かいながら熱々のバーホーテンのココアをちびちびと口に含んでいる銀髪の魔女…スオムス空軍中尉、エイラ・イルマタル・ユーティライネン。
他の２人が非番で町に出掛けているので、今はこの二人で留守番中だ。

「ただいま！」
ドアを勢い良く開けて入ってきたのは、エーリカ・ハルトマン。
カールスラントのトップエースで、人類最高撃墜数を持つ魔女である。
私生活は壊滅に等しいが…
今回はこの統合戦闘航空団の隊長をつとめる。
「ただいま…」
その後ろから静かに入ってきたのはアレクサンドラ・ウラジーミロビナ・リトビャク。
夜間飛行の得意なナイトウィッチだ。
「あ、お帰りなさい」
「お帰り」
「寒かったよぅ…あ、いいなココア。私にも炒れてくんない？」
「自分で炒れろよ、ハルトマン…」
「えー。けち…」
「炒れてきましょうか？」
クリスが尋ねた。
「うん、お願い。ミルクと砂糖たっぷりめでね」
「了解…あ…サーニャさんどうします？」
クリスは、後ろの方で立ち止まっているサーニャに尋ねた
「…そうね…お願いするわ…」

「そういや、隊長…違った。司令と会ってきたんだよな」
絶対量が少なくなり、すっかり冷めたバーホーテンを流し込んでエイラが言った。
司令とは、ミーナの事。ゲルトルート・バルクホルンと同じく、既に飛べない身になっているので、今回は後方からの指揮を執る。
「町に出るついでにね。」
ハルトマンが答える。
「何だったんだ？用件は。」
「これ」
ハルトマンが取り出したのは、それなりの厚さのある茶色の封筒である。
「なんだこれ…名簿…？」
「増員の名簿だよ。」
「へえ…どなたが来るんです？…あ、エーリカさん、サーニャさん、ココアです。」
湯気の出ている二つのマグを持って、クリスが言った。
「ありがとう。」
「サンキュー。」
ハルトマンは、渡されたあつあつのミルク砂糖たっぷりめバーホーテンを飲んでから
「読んでみれば？」
といった。
「ふうんそれじゃあ…」
エイラが封筒から取り出し、ピラピラと名簿をめくる。
「…元の奴は殆どだな。」
「来ないのは坂本中佐とミーナ准将だけね」
サーニャが言った。
「（ピラピラピラ…）…おっと…（パタ…パタ…パタ…）（ピラ）」
「新しい人達ですか？」

とクリスが尋ねると
「（ズズ…）うん。」
と、ハルトマン
「1、2、3、4、5、6…6人か…だいぶ増えたな。」
「いや、それだけじゃないよ。」
「？…どういうことだよ」
「封筒の中にもう2、3名簿あるでしょ？」
「それ整備とか防空隊とか衛生とかのだろ？」
「もうひとつあるんだよ…ほら」
「陸戦隊？」
「そう。えーと…何だったっけ？」
ハルトマンがサーニャに聞いた
「「来るべき反抗作戦にそなえて指揮系統を同じにした単独で作戦を行える部隊を設立することにしなった」です。」
「そうそうそれ…で…「辞令、連合軍第５０１統合戦闘航空団通称“ストライクウィッチーズ”は、本日をもって解散とし、連合軍第５１１統合戦闘混成団を設立する。なお、連合軍第５０１統合戦闘航空団の元隊員については、全員第５１１統合戦闘混成団に異動すること。第５０１統合戦闘航空団司令、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。」…だって。」
「通称は？」
クリスが言う。
「「まだ決まってない」ってさ。あと面白いのがね…これ。」
「衛生隊？…この辞令聞いた後なら何だって驚かないぞ？」
「驚くはずよ。」
サーニャが言う。
「えーと…マジか！？」
その紙にはこう書かれていた。
連合軍第５１１統合戦闘混成団、軍医長、扶桑皇国海軍軍医中尉
宮藤芳佳

『それで…皆には話したの？』
「うん。最初は驚いてたけどね…そんなにショックじゃなかったみたい。」
夜も更けたころ。ハルトマンは隊長室で電話をしていた。
古城とは違い、急造鉄筋コンクリートの建物はそんなに広い物では無い。
個室が割り当てられているのは隊長たるハルトマンのみだ。
電話の相手は司令、ミーナだ。
『そう…』
「軍医長の方は相当驚いてたけどね」
『うふふ…そうでしょうね。』
「まあ変わることといったら歩行脚が加わる事位だからね。」
『そうね…』
「…やっぱさみしい？自分の指揮した隊がなくなるのは」
『ふふ…大丈夫よ。』
「そうかあ？」
『ええ、大丈夫…明日はたしか…クリスさんとサーニャさんが非番だったわよね？…ところで良くエイラさんがその組み合わせを納得したものね…』
「ああ、くじ引きにしたからね。毎回同じ組み合わせじゃ何だし。なによりクリスを隊に溶け込ませたかったし」
『ふふ…じゃあその二人に言伝てをお願いできるかしら？』
「何て？」
『明日ね、2人ほどそっちに着くかもしれないから、町で見かけたらつれてきちゃってって。』

「ああ、うん解った。」
『じゃあ…そろそろいいかしら？』
「うん。またね」

01　宮藤軍医中尉（前書き）

2期始まりましたね（汗）
完璧なるパラレルワールド作品になりました。
そのつもりで読んで。

01　宮藤軍医中尉

１９４５年、冬。
清帝国、ハルビン郊外、扶桑皇国陸軍の設置した防疫給水所の近く。
子供は自立し、老夫婦が二人で暮らす、どこかひっそりとしたそんな家で、扶桑皇国海軍軍医小尉、宮藤芳佳は暮らしていた。
猛勉強の末、中学卒業とともに医術開業試験に合格し、９月に軍医になるための実地研修の名目で外国の…それも陸軍の施設に預けられて三ヶ月。
少しでも多くの人を守り助けたいと、宮藤は家の二階の１間を借りて宮藤診療所ハルビン支所を立ち上げ、伝染病感染の有無の確認や拡大防止などの軍の任務の合間をぬって病院稼業中だ。
きょうも診察が終わり、書類整理やらそのほかの雑用をしていた。
そのとき、玄関の方から声がしたのだった。
これが、宮藤にとって、この自分の物語の始まりを告げる声だった。

「芳佳ちゃ～ん！電話～！」
老婆の声だった。
「は～い！」
電話？誰だろう…
そう思いながら宮藤は、一階に降りて、老婆に小声で訪ねる。
「どなたですか？」
「ええと…イワイノさん、とか言った…」
そういいながら老婆は受話器を宮藤に手渡す。宮藤はそれを受け取った。
「お電話替わりました宮藤です…はい…はい…わかりました。」
ふう…と一息ついて、宮藤は黒い受話器を置いた。チン、という音

がした。
「何だったの？」
老婆は心配そうに聞く。
「ええと…軍の方に一寸出掛けて来ます。」
「はいはい、気をつけてね。」

そんなわけでハルビン防疫給水所内。
「ええと…あ、あった」
宮藤は、所長室、と書いてある部屋の前で止まった。
漠然と緊張し、女子校時代、職員室に入る時のあの感じを思い出した宮藤は、大きく深呼吸して、それから、えいとばかりに声を出した。
「宮藤芳佳、只今参りました。」
「おお、来たか。入ってくれ。」
「失礼します。」
部屋に入ると、小太りの男が椅子に腰掛けていていた。
この男こそ、先ほどの電話の男、イワイノさん…祝野三郎である。
階級は軍医中将、このハルビン防疫給水所の所長で、関東軍防疫給水部の部長だ。
「どうだ？診療所のほうは。」
と、祝野は切り出した。
「相変わらず大変ですけど…まあなんとか」
宮藤は答える。
「そうか、それは良かった…ところで内地から転勤辞令が来ているぞ」
「本当ですか！？」
「嘘ついてもしょうがないだろう？」
「いや、まあそうですけど…何処にですか？」

「オラーシャだ。」
「オラーシャ？…ああ、あの反抗作戦。」
「そうだ、その同地で開始する反抗作戦に参加させるために特別編成の統合戦闘混成団を結成するらしくてな…」
「統合戦闘混成団？」
「なんでも統合戦闘航空団をベースに陸戦魔女も入れた空陸協動部隊を作るらしい。」
「なるほど…指揮系統を同じにして運用し易くするわけですか。」
「そこまで私は知らんが…まあいい。」
祝野は一枚の紙を取り出し、読み上げた。
「扶桑海軍軍医少尉宮藤芳佳。連合軍第５１１統合戦闘混成団に参加せよ。扶桑皇国海軍軍令部。」
「了解！有り難く承ります！」
祝野がうなずく。
「それともうひとつ、向こう、軍医官が足りないらしくてな…統合戦闘混成団の軍医長をおまえに頼みたいそうだ。」
「私が…ですか？」
「そうだ」
「いえいえ、私はそんな…」
「連合軍の決定だ、反論は許されん。それにこれはヴィルケ准将の推薦でもある。」
「ミーナ准将のですか！？」
「ああ、どうだろう…」
「…やります。」
少し考えて、宮藤は答えた。
「それは良かった、ではこれを」
そういうと祝野は何かを投げて寄越した。
「うわっと！…これは…」
「一応責任者だからな、宮藤芳佳、中尉に昇格だ。」
「あ…ありがとうございます！」

「あとまだ何かあったっけか？……そうだ、ちょっと高麗王国まで使いを頼まれてほしいんだが…」
「高麗王国？…何ですか？」
「新人だ、お前が坂本中佐にブリタニアに連れて行ってもらった様に、こんどはお前が連れていくんだ。できるな？」
「はい、勿論です！」
「そうか、ではよろしく頼んだ。オラーシャでの健闘を祈る。」
「……」
「……」
「……」
「……何だ？」
「いつ出発ですか？」
「ああ！忘れる所だった、すまんすまん。明日午前８時に航空機が迎えに来る、それまでに出立の準備をしておけ。」
「了解！」
「では改めて健闘を祈る！」
「はい！」

翌朝、荷物をまとめた宮藤は、迎えのキ７７で平壌に向かった。

０１　平壌到着

高麗王国、北の都平壌。
この空に、優雅な扶桑機が舞っていた。
何のことはない、さっきハルビン郊外から飛び立ったキ７７だ。

「……尉、……中尉、聞こえますか？宮藤中尉？」
その中で少し微睡んでいた宮藤は、そんなパイロットの声で目を覚ました。
機長と副機長を除けば、乗っているのは宮藤一人。
席を立つと宮藤は、操縦席まで歩いた。
「もうすぐ平壌です。ほら、見えますか？前方の…」
パイロットの指差す先には、滑走路と、鉄骨が剥き出しの小さな管制塔、そして幾つかの建物がどうにか存在するような小規模な空港があった。少なくとも、彼女にはそう見えた。
「ええと…ああ、あれですか…？」
宮藤が応えると、パイロットは宮藤の指している方向を確認し、少し笑って応えた。
「違いますよ、前方にいるでしょ？魔女が、ストライカーはオラーシャのＭＩＧ－１５…けどあの標識は高麗空軍ですね。というかあの飛行場は民間のですよ？平壌基地はもうちょっと先です。」
そう言ってから、パイロットは機体を左右に軽く振った。バンクというやつである。
「一寸…てどれくらいですか？」
「ざっと２０分位です。降りる準備をしておいて下さい。」

「あんたが宮藤中尉か？」
飛行機から降りた宮藤に、誰かが話かけて来た。
宮藤がそちらを見ると、背の高いスレンダーな娘がいた。
自分と同じ１６歳位かな…と宮藤は思った。
「はい…宮藤芳佳ですけど…」
宮藤が答える。
「私はリ・ウンヨン。高麗王国空軍中尉で、レイヒの教官をやってる者です。よろしく。」
ウンヨンが右手を出したので、こちらも差し出し、握手する。
それはいいが、肝心の新人の姿が見あたらない。
「ところでキムさんは…」
宮藤は率直に質問した。
なにせその娘がいないと始まらないのだ。
するとウンヨンは、言いずらそうに言った。
「…いやね…今朝から見当たらないのよ、大方平壌の町を走っていると思うんだけど…」

「ぬぁ～！遅刻～！」
門の方から何かが走って来た。
「あ、来た。」
「え？来たって…」
「うん、あれ。」
気だるそうに頭をおさえて、ウンヨンが言った。
黒い瞳に黒い長髪、小柄な少女。
「お、お、遅れました…」
彼女こそ、キム・レイヒ。統合戦闘旅団所属となった新人の一人だ。
「まったく…今日は客人が来ると言ってたでしょう…？なんでいつ

もは遅刻なしでこういう日に限って遅れて来るのよ…。」
「申し訳ありません…」
「…まあいい、それよりほら、ちゃんとご挨拶しなさい、今日からあなたの上司となる扶桑皇国海軍の宮藤芳佳軍医中尉よ。」
するとキムは、
「え…う、うわぁ！よっ、よろしくおねがいします！金・麗姫、高麗空軍軍曹です！」
と、直立不動で、挙手敬礼をした。
「宮藤芳佳です、よろしくね。」
宮藤は、その挙動ににこりと笑い、それから答礼した。

０１　平壌到着（後書き）

金麗姫（Ｒｅｉｈｉ　Ｋｉｍｕ：キム　レイヒ）

１２歳、高麗王国空軍軍曹。
今回５１１ｓｔＪＦＣ（Ｊｏｉｎｔ　Ｆｉｇｈｔｉｎｇ　Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ）配属になった新人。
くよくよせず、さばさばした大雑把な性格。大飯食らい。
何かあるとはしゃぐタイプ。しかし、天真爛漫とは一線を画す。
趣味や性格や考えが少々老けている。おっさん臭い１２歳。
イメージモデルは朝鮮人民開放空軍のキム・キンオク。

李雲易（ｒｉ　ｕｎｙｏｎ：リ　ウンヨン）

１６歳、高麗王国空軍中尉
もともと深く考えるタイプだったが、レイヒと一緒になってからはその癖がさらに悪化した。
相手の気持ちが読め、他人の奥深い所まで探りを入れる。
今はレイヒが心配で仕様がない…戦いとかではなく、生活の事とかで。
解らないことが解らないままだと気持ち悪くてしょうがない人。
バイクが趣味。輸入したハーレーを駆る。
イメージモデルは朝鮮人民開放空軍のリ・ドンギュン

02　噴流の箒

「まあ、挨拶は済んだし、出発は明日、今日のこの後は自由に使って下さい。ただ、外に出るときは守衛に一声かけてからでね。」
ヨンヌがそんな事を言った。

「…で、どうします？宮藤中尉。」
レイヒが言った。
「え？うん…まあ外に出てお薬とかを買っておきたいけど…ちょっとその前にレイヒちゃんがどんなストライカーを履いてるか見ておきたいな」
「わかりました、こっちです。」

宮藤はレイヒに連れられて格納庫に案内された。
一口に格納庫と言っても、この基地にはストライカーユニット用と航空機用の２つの格納庫がある。
何故ならこの平壌基地は、魔女部隊と航空機部隊が混成する複合基地なのだ。
航空機用格納庫ハンガーはそれなりに大きく、作りもしっかりしていた。
しかしもう片方、つまりストライカーユニット用の格納庫は、まさに掘っ立て小屋と言うような建物だった。
これは中の状況はひどい物だろうな…と、宮藤はそれなりに覚悟した。

覚悟したは良かったが、中は意外にも小綺麗になっていて、ストライカーユニットが2組と、そのストライカーユニットの部品、銃、整備道具、そのほかいろいろがきちんと整頓されて置いてあった。
その意外な小綺麗さに、宮藤は素直に驚いた。

そのうちに、レイヒが片方のストライカーユニットに近づいて説明を始めた。
「私のはこれです。オラーシャから供給されたＭＩＧ－１５、噴流式魔導エンジンの最新式なんですよ。」
「速さは？」
「最大時速が１０４０ｋｍです。普通に飛ぶんだったら時速８００ｋｍ位ですかね…。」
「私が最後に履いたのが最大時速６００ｋｍ位だったから…相当速いんだね。銃は？」
「オラーシャ製のＡＫ－４５、安いからって軍の方が大量に仕入れた突撃銃です。まあ、弾は魔女用に、っていうふつうの弾ですけど…」
「ふうん…どんな感じ？」
「機関銃よりは扱いやすいですし、壊れにくいし、単純構造なので整備も楽です」
「へえ…良さそうね」
「試し撃ちしますか？」
「ううん、私はそういうの解んないし…どんなのか見てみたかっただけだよ。」
「そうですか…じゃあ外行きますか！」
「そうだね。」

０２　噴流の箒（後書き）

雑用長（以降永久に雑）：はいこんにちは、作者の雑用長です！今回はこんなのを読んでいただき、感謝の極みであります！

ＡＫ４５：何なんだここは…

雑：ここは出てきた機械やら銃やらの製と作品解説などを行っていくコーナーだ！

ＡＫ４５：なるほど…「艦魂たちともう一つの太平洋戦争」の作者の火龍さんのパクｒ（バキッ！）…うぎゃあ！なにするだ！

雑：いやなんとなく

ＡＫ４５：なんとなくで人を殴るな（パーン）

雑：お前もな、そう軽々しくトリガーに圧力をかけるな

ＡＫ４５：つべこべ言ってないで作品の解説とか…

雑：ああそうそう、今回は…ＡＫ４５君のことについてかな。架空の銃だけどモデルはもちろん史上最高の大量破壊兵器と名高いＡＫ－４７、アブトマット・カラシニコフ４７。

ＡＫ４５：要は史実の年号と合わないから年式番号変えたわけね。

雑：まあそう言うことだね

ＡＫ４５：適当だな…

雑：いいじゃないか。年式も合わないの無理矢理だすってのは作者はその銃が好きってことだよ

ＡＫ４５：まあそうだな…そういう事にしとくか…それにしてもネウロイに突撃銃が効くのか…？

雑：弾の規格は機関銃と一緒だからなんとかなるんじゃない？

ＡＫ４５：そんなもんかね…おっとそろそろ時間か？

雑：そうね…いやあ、楽しい時が過ぎるのは速い！では次回もお楽しみに！

４６：だーすびだーにゃー

０３　波乱の予感

堅苦しいことさはやめて、平壌をふらふらと歩く事にしようと言うことで、宮藤とキムは門を出てた。
流石は高麗第二の都市ということもあり、町は活気に溢れていた。

「ところで、宮藤中尉は何を買うんですか？」
「薬になる様な乾物とか…」
「なるほど…じゃああそこかな…よし、付いてきて下さい、お勧めのお店に案内します！」

「ずいぶん裏通りに入って来たね…」
「ここら辺に入って来ないと良い店はありませんよ。表のはぼったくりです。…あ、着いた着いた。知る人ぞ知るいい店です。構えは微妙ですけど…」
裏通りを奥深く入った所に、その店はあった
薬草や漢方薬、お酒、干物などを揃えている
店構えはややくたびれていた。
「おばさ～ん、居る？」
キムがそう呼ぶと、店の中から、８０位のおばさんが出てきた。
「はいはあ、どなた…まあ、レイヒちゃん！元気だったかい？」
「はい、おかげさまで。」
「そうかい…そりゃよかった。きょうもいつもの？」
「いえ…今日は、お客さんを案内しに来たんです。」
「お客さん…ああ、後ろの人？どちら様？」

宮藤は答えた。
「扶桑海軍の、宮藤芳佳です。」
「ああ、扶桑さんね…で、何をお探し？」
「ええと…高麗人参と…高麗朝顔…あと高麗酒のそこそこの奴と…その他にも色々とあれば。」
「フンフン、なるほど…もしかしてあんた軍医さんかい？」
「え？ええ、まあ一応。」
「フゥン…」
長くなりそうなので、レイヒは外に出る事にした。

表に出れば、薄暗い裏路地である。
上を見れば屋根の合間に冬の青空で、どこかうっすらと空気が煙ったいのは、オンドルの為だろうか。
肌寒い北風が通りを吹き抜けていきました。
キムはそのまま壁に背中を付けて目を閉じた。
聞こえるのは、木枯らしの音と、それが運んでくる表通りの喧騒。
今日でこの町と暫くお別れだと思うと、人間というのはそういう小さな事までもが愛おしく感じられてくるのだろうか。
キムは暫くの間、生まれ育ち、慣れ親しんだ土地の鼓動を感じていることにした。
しかし、キムが現実に引きずり戻されるのに、そう時間は掛からなかった。

04　モーゼル・シュネルフォイヤー

宮藤はさっきの店から、紙袋を抱えて出て来た。
「買った買った…あれ？…」
レイヒちゃんが居ない…？帰ったかな…
…そうだ、レイヒちゃん常連さんだったみたいだし、心当たりをきいてみよう
宮藤は来た道を戻ることにした。

宮藤が店に戻ってきた時、老婆は椅子に腰かけて本を読んでいた。開いた戸の方を一瞥して、それから本の方に視線を戻し、「どうしたい？海軍さん。」と言った。
「…レイヒちゃんが居ないんです。帰っちゃったのかな…て思ったんですけど…心当たりとか無いですか？」
宮藤が答えると、老婆は本を捲っていた手を止め、そのページに栞を挟み、老眼鏡を外して宮藤の方に向き直って
「…あの娘は、尊敬する先輩を置いて一人で帰る様な娘じゃあないってことは確かだね。特にあんたの大ファンらしいよ？あの娘。」
真剣な顔で言った。
「ふふ…へえ、そんなことを言ってましたか。…でもそれじゃあ一体どこへ…」
「…この国はそんなに治安が良い訳じゃないってのは知ってるかい？」
「一応聴いてはいましたけど…」
それぐらいで驚いたりはしない。ついこの間まで宮藤のいたハルビンは、扶桑の施設から少し離れればもっと悪い位だった。
「治安の悪い国の裏路地を女の子が一人で歩いていたらどうなると

思う？」
「…」
宮藤がハルビンに居た頃何度も見た、女の子の泣きじゃくる顔が頭に浮かんだ。
それから、いやいやまさか、と現実逃避した。
がしかし、
「もしかしたらあの子は二度と飛べなくなるかもしれない。」
事はそんなに甘く無かった。
「た、大変！すぐ探さなきゃ！」
「まあ落ち着きなさいよ。」
「落ち着いて居られるわけ無いじゃ無いですか！」
「あてもなく探してもしょうがないだろう？医者は…特に軍医はいつでも落ち着いていなきゃだめだよ。」
「でも…」
「いいから、先輩の言うことは良く聞いとくもんだよ。軍医長さん。」
「…どっかあてがあるってことですか？」
聞きたいことはありすぎて困る位あるが、今はそんな話をしている場合ではない。
「当たり前だよ。何年この町に住んでると思ってんだい？」
知るわけ無いじゃない。と、宮藤は心の中で悪態をついた。

激しい頭痛と共に、レイヒは目覚めた。
しかし目の前は真っ暗で、一筋の光すら差し込んで来ない。
何で…？
動こうとしてレイヒは、突然手の痛みに襲われた。有刺鉄線だろうか。
もしそうなら、魔力を使って無理矢理外そうとすれば、手が無くな

ってしまうだろう。
叫ぼうとすると、くぐもった呻きしかでない。
猿轡を噛ませられているらしい。
逃げなきゃ…

「ここ最近何者かによる強姦事件が多発しててね。狙われる年齢、職業、その他もろもろは統一性もまるでないの。
一応警察は捜査してるけどこっちだっててぐすね引いてまってる訳には行かないからね。調べさせておいたのよ。」
「…それでどこに！」
老婆は地図を取り出し、サインペンで赤く丸を付けた場所を指差した。
どうやら廃倉庫らしい。
「ここ。」
「行ってきます！」
「待ちなさい。何も持たずにどうする気？」
「あ…」
「はい地図…あと…これね」
「これは…？」
「モーゼルＭ１９３２シュネルフォイヤー。」
「拳銃なら私もう持ってますよ？」
宮藤が今使っているのはハルビンの治安の悪さから必要に迫られて現地で買ったトカレフＴＴ－３３（の清国北方工業公司コピー製品）。
幸い抜くことはあっても使ったことは無かったが…
「そんないつ暴発するか解んないのもちなさんな、いいから持って行きな。」
「有難う御座います！」

「礼なんか良い。早く！」
「はい！」

０５　絶体絶命からの危機一髪

足を動かして這う。ここが何処であろうと壁があり、沿って進めば出口は必ずあるはずである。
手が痛いが、そんなことを構っている暇はない。
何とか人が来ない内に逃げなきゃ…
しかし、扉の開く音は無情にも廃倉庫に響く。
誰かが入ってきたらしい。
レイヒは、それが助けだと信じた。
信じたかった。

宮藤は平壌の町をひた走る。
向こうから来たバイクが宮藤の前で止まった。
「あら、芳佳さん、どうしたんです？そんな走って。」
「ウンヨンさん！…いや事情は後！ここに向かって！」
「…何しに行くんです？こんな廃倉庫…まあ…かまいませんが…」
ウンヨンはヘルメットを投げてよこした。
宮藤は其を被ると、バイクの後ろに乗る。

宮藤は事情を話した。
説明の途中、ウンヨンは終始黙っていた。
話が終わるとこれもまた無言で…何かを深く考えているような感じでスピードを上げた。

“何か”が近寄ってくる。
怖い。
“何か”は、レイヒの隣に立つと、レイヒのうっすらと日焼けした健康的な脚に触れた。
荒い息使いが聞こえる。
「っ…！」
魔力を発動したレイヒは、渾身の力を込めて、その息のする方…つまりは“何か”の顔面目掛けて脚を振るう。
次の瞬間、“何か”は、壁に向かって吹き飛んだ。

その少し前、平壌基地。
平壌基地の司令室の電話が鳴った。
「はい、こちら平壌基地」
『木林だよ』
「木林の婆さん…！何でこの番号知ってるんだ？」
『調べさせたんだよ。』
「やれやれ…扶桑の退役軍医中将にかかっちゃこんな弱小軍の機密なんて無い様なもんか…何の用だ？」
『何の用とはご挨拶だね、小僧。…いや、今はそんな場合じゃ無かった。実はねぇ…（かくかくしかじか）…なんだ。』
「なにぃ！？場所は何処だ！？」
「表に鳥が居ないかい？」
「え…あ」
鳩が一羽、止まっていた。

蹴った反動で立ち上がったレイヒは、その固有魔法を発動させた。
レイヒの固有魔法は精神感応能力。
相手の思考を読み取ったり、相手にこちら側の意思を伝えたりする物だ。

レイヒは“何か”の頭の中から、この部屋と自分の方向と位置を抜き出し、出口に走ろうとする。
しかし、意識を取り戻した“何か”が、レイヒを突き飛ばした。レイヒはうつ伏せに倒れ、頭をぶつける。
「う〝ぐぅ！……」
“何か”は、レイヒの脚までも固定した。
逃げ道は既に無い。
もう、だめか…
レイヒがそう思った時。

銃声が響いて、“何か”の叫び声が聞こえた。
“何か”の太股を、宮藤の放った銃弾が貫いたのであった

０５　絶体絶命からの危機一髪（後書き）

？：やっとこ私の出番か

雑：ええまあ。設定だけで本編登場してませんもんね、あなた。

？：そうなんだよ！…あ、申し遅れました私、モーゼルＭ１９３２です。

雑：そんなわけで今回は宮藤のサイドアーマーさんです。

雑：所でＭ１９３２って何？あんたＭ７１２じゃないの？

モ：Ｍ７１２っていうのはリベリオンの店が付けた名前でね。本名はＭ１９３２なのさ。

雑：ちなみに連射が可能。今回は宮藤のメインアーマーとして頑張っていただきます。宮藤が医者なんで。

モ：それはそうとこの木林のばあさんって一体何者？

雑：さあ…ニヤリ。

モ：なんだその笑みは

雑：いえ何でもありませんよ…ちなみにちゃんとモデルいますよ？

軍医で中将で物書きです
歴史と国語の教科書には必ず載ってます。
木林を縦に並べると…なんて漢字になるでしょうねえ。

モ：これ…ほとんど答えじゃねえか？多少なりとも文学史勉強したらすぐ解るぞ？

雑：脇役なんだからそんな謎にしなくてもいいだろ？
ちなみに物書さんはあと2名登場予定です。

モ：軍人と物書…自由ガリアの貴族飛行士と扶桑陸軍の時代小説家？

雑：そ…そそそんなことあるわけないじゃないですかあははは（汗）

モ：図星…いいのかこれ…

雑：大丈夫大丈夫。これからも宇宙飛行士やら世界最強のスナイパーやら馬術金メダリストやら出てくるから。

モ：まあ朝鮮のウィッチ出た時点で怖いものなんて無いんだろうけどさ…まだ存命の人もいるぞ？

雑：いいんじゃ…ない…？…皆さん今回はこの辺で！さいなら！

モ：あ！おまえちょっとまt…なんだよこの緞帳！

雑：さよーなら…

（緞帳閉まる）

06　雲易の疑惑

その夜のこと、宮藤とレイヒの歓送迎会が開かれた。
しかし、その車座に加わっていない者がいた。
他ならぬ宮藤である。

レイヒを抱えた宮藤と、犯人を引き摺ったウンヨンが廃倉庫から出てきた時、既に建物の周りは高麗王国の憲兵達が取り囲んでいた。
何でも木林さんから連絡があったと言うことだ。
その後レイヒはヒーリングとカウンセリングを受けて（幸い、精神状態ともども特に問題は無いらしい。）明日、扶桑に旅立つことになった。

だが…何かがおかしい、何か引っ掛かる。
ウンヨンは考えていた。
私たちは人を攻撃する事には馴れてない。いや、むしろ素人以下。
対人戦闘では、役に立たないに等しい。
実際、バイクに乗っている時も、“もし犯人に会って、引金が引けるのだろうか？”その事だけが頭に浮かんだ。
しかし、あの時の宮藤には、躊躇いなど一切無かった。ただ冷淡に、モーゼルの引金を引いた。
戦闘記録ではネウロイと戦う事すら疑問を抱いた宮藤が、だ。
…調べてみるか。
「レイヒ…」
ウンヨンは、しばしお別れのため、祖国の料理をほうばっている…

というか掻き込んでいるレイヒに訪ねた。
「…ふえ？はんへふはひゅーい」
「…いやいいです、飲み込んでから喋んなさい。」
「ひょーはい…むぐむぐ」
「昼あんなことがあってよくこんな食えますよなぁ…」
「むぐむぐ…んく…それは違いますよ中尉！」
「何が？」
「昼あんなことがあったからこそ、忘れるために食べてるんです！」
「…まったく、あなたの大食ぶりには恐れ入りますよ…オラーシャ行ってもそれじゃ駄目ですよ？私がいないからって何でも見境なく…」
「他の命令なら何でも聞きますけどそれはちょっと保証できないです。…あぁ、ピロシキとボルシチが私を呼んでいる…」
「…（ブチッ）（バキッ）」
気付くとウンヨンは、レイヒの脳天目掛けて拳骨を放っていた。
「痛ッ…くぅ…な、なんなんですか！」
「旅行じゃあ…ないんですぜ…レイヒサン…？」
「…すいません…ちょっと調子乗ってました…で、なんですか？」
「本題切り出すのにここまで時間がかかるとは…芳佳さんは？」
「ああ、宮藤中尉なら、木林さんのとこに行きましたよ。」
「また…？」
「ええ、なんでも「去る前に一度挨拶を」って。」
「ふうん…よおし、追っかましょう！」
「へ？私まだ食べてる…」
「いいから！」

「…宮藤さん。明日には出発だろ？いいのかい？こんなところに来てて。」

何やら書き物をしている木林が、背を向けたまま宮藤に言った。
「はい、別に余所者がいなくても大丈夫だと思います。それに金さんには話して来ましたし。」
「まあ…丁度聞きたいこともあったしね。」
そう言うと木林は万年筆を置き、宮藤に向き合った。
「聞きたいこと？」
「あんたらもそうだろう？外の。」
突然、木林は外に向かって呼び掛けた。すると、
「ウンヨンさん！…レイヒちゃん！」
約2名の魔女が現れた。
「ばれたか…」
とウンヨン。
「だから止めとこうって言ったんですよ…」
とレイヒ。
「一っ言も言ってないでしょうが！」
「良いから座りなさいって。」
木林がそう諌めると、二人は渋々腰を下ろした。
「それで…聞きたいことって言うのは…？」
だいたいの予想は付いているのか、宮藤が恐る恐る言う。
「いくら強姦魔とはいえ、躊いなく人を撃った理由ですよ。私たちは人と戦うことは馴れてない。私だっていくら戦争とはいえ、国と国…人と人との戦いになったらまともに戦える気がしない…でもあなたはためらいもなく引き金を引いた。戦闘記録映画ではネウロイとすら戦うことを躊躇ったあなたが、ですよ？」
「…」
「だいたい何でハルビンなんて弩田舎に居たんです？仮にもあなた8機撃墜のエースパイロットだったでしょうが。いくら軍医研修つったっておかしいでしょうに。」
「…」
「いったい何があったんです？芳佳さん。」

「…本当に話さなきゃダメ？昔の恥は胸の奥にしまって置きたいというか…あはは。」
きまり悪そうに宮藤が尋ねたが…
「だめ。」「話せ。」「そこでそのおちは無いですよ！」
あっさり抹殺。
「そうですか…まあこれから僚機になる訳だし、レイヒちゃんには話しといたほうがいいかな、うん。」
分かりました。じゃあ…そうして、息をついてから、宮藤は話始めた。

07　宮藤語る

１９４５年３月中頃、欧州のネウロイはほぼ駆逐され、連合軍はカールスラントとロマーニャに残った最後のネウロイを包囲。この大戦にも終わりが見えてきたかの様に見えました。
しかしそれと同時期、扶桑の太平洋戦線にも、異変が起こっていたんです。
フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシア等、東南アジアの扶桑南方同盟各国沿岸に比較的小型のネウロイの巣が出現し、不気味な沈黙をたもっていました。

その頃の私は、丁度医者としての第一歩を踏み出した頃でした。
欧州から帰ってから勉強をして、中学校を卒業と同時に試験を受けて晴れて医者になり、母（私が医者になると同時に祖母は引退しました。）とともに診療所で働く毎日。
そんなある日のこと…１９４５年の４月１日、この日を境に、私の人生は…大きく変わってしまいました。

「どきどき…」
「口で言いなさんな…ところで、芳佳さん。」
「なに？」
「欧州に帰ってきてから…って言ってたけど、扶桑皇国ってそんな簡単に医者になれるんですか？」
「ええと…扶桑で医者になるにはね、中学を卒業した人が、三年制の医学専門学校に通うか、医者の元で三年間修業するかして医術開

業試験を受けなきゃいけないの。私は後者だよ。横須賀第四中学校に入ってからは家事手伝いをしてたから、卒業と同時に試験を受けて合格したの。」
「ふうん…あれ、でも軍属の間は？」
「実地研修っていうお墨付きを扶桑海軍からもらったんだ。」
「なるほど…」

１９４５年４月１日。
ネウロイは相次いで進行を開始、南方の同盟各国や台湾、マリアナ諸島が陥落し、沖縄、小笠原に迫るネウロイ。
そして、そこが落ちれば次は本土。
そんな日の事でした。突然懐かしい人が現れたのは。

07　宮藤語る（後書き）

はい、では木林中将のイメージモデルの答え合わせです。
正解は…大日本帝国陸軍、森林太郎軍医総監（軍医中将相当）です。
まあ…夏目漱石と並ぶ文豪、森鴎外と言った方がわかりやすいかしれませんね。

ではまた。

08　カーキの略装

「はい、もう大丈夫ですよ！おばあちゃん。」
宮藤よろず診療所。
ここには今日も昨日も色々な病の人が集まってくる。
今は、畑仕事で腰を痛めたお婆さんを診察中だ。
「いつもありがとうねぇ。芳佳ちゃん。だいぶ楽になったよ。」
「畑仕事もわかりますけど、ちゃんと休まないとだめですからね？」
「はいはい。じゃあね～」
「はーい…ええと…」
診察も終わってお婆さんも出ていったので一応待合室に誰も居ないのを確認すると、いくつかの書面…まあ要するにカルテとかその類いだが…を色々と書き足そうかと向き合った瞬間、懐かしい人が血相を変えて入ってきた。
「宮藤さん！、宮藤さんはいらっしゃいますか！？」
「ど、どうしたんですか土方さん…急に。」
彼は土方、坂本小佐の侍従兵だ。
「至急横須賀基地への出頭を願います！」
「横須賀って…何かあったんですか？」
「…ラジオ聞いて無いんですか？」
「そういえば朝からかけてませんけど…」
「ええと…ネウロイが現れて沈黙を保っていたっていうのは…流石に知ってますよね？」
「ええまあ…」
連日放送されていたから、それぐらいは知っている。
「あの、まさか…」
「…残念ながらそのまさかです。扶桑皇国はネウロイと交戦状態に陥り、既に南方同盟各国やマリアナ諸島は陥落しました。現在小笠原と沖縄で交戦中です。…それで出撃した坂本小佐が小笠原上空の

空戦で負傷しました。」
「坂本さんが！？」
「横須賀は負傷兵で溢れて軍医は手が回らないし…私が頼れるのは、宮藤さん、貴女しか居ない。」
「…解りました。行きます。」
「有難うございます！必要なものはここに入ってます。」
土方は、ジュラルミンのアタッシュケースを取り出し、宮藤に渡す。
宮藤が開けると、緑色のワイシャツと背広、略帽、階級章、白衣が入っていた。
「…これは？」
「略装です。宮藤さんには、これに着替えて頂きます。」
「なんでこんな…？」
「…その格好のままでは基地内で活動できないんです。というのは…宮藤さんは医師免許をお持ちでしたよね？」
「はい、3月の卒業と同時に…」
土方は略装の上の階級章を取り
「今回宮藤さんには、少尉として復帰して頂きます。」
と言った。
「少尉？私がですか？」
「正確には軍医少尉です。衛生兵だと、軍医の指示無しでは動けないんです。比べて軍医なら少し自由がききますし、衛生兵に指示を出すこともできる。」
「…」
理屈は解る…でも、此を着たらもう…戻れなくなる様な気がする。
…
今はそんな場合じゃない。今救える命を助けなきゃ

私の力で、多くの人々を守るために。

08　カーキの略装（後書き）

Q. なぜ宮藤の服装を第三種軍装にしたか？

A. 一期「スースーするの」のときの宮藤の第二種軍装があんまり似合ってないような気がしたから。

09 “軍医”宮藤の実力

「その時ならどこでもそうだったでしょうが、当時は横須賀基地もやはり酷い状況で、滑走路には数えきれない程の飛行機やストライカーの残骸があり、港には沈みかかった艦が何隻かとまっていて、もう出るものも入るものも居なくなり、野戦病院として使われたハンガーの中は、呻き声や叫び声、罵声や怒声が絶え間なく聞こえ、死臭が漂い、どこを見渡しても血塗れという状態でした。」

宮藤は一つ一つ、言葉を絞り出すの体で話した。言霊とはよく言ったことだ。一つ一つの言葉が重かった。

「それは私が初めて体験する“地獄”で、そしてこれから何度も遭遇することになる“戦争”でした。」

宮藤は何かを懐かしむような口調で言った。

初めて体験した地獄が、もう通常起こりうる戦争になってしまっているというのは、どれほどの修羅を潜り抜けて来たんだ…とウンヨンは思った。

こんな半島の弱小軍でたむろしている様では、私たちは絶対にこの人たちに追い付けない。

今回のレイヒの派遣では、航空歩兵先進国のエースパイロットの中で学び、他の国との空戦技術の差を解消するという目的もあった。

ウンヨンは、それは素直にいいことだと思ったし、それに自分の弟子が選出されたということを誇りに思った。そして少し羨ましかった。

でも…いや、この先を考えるのはよそう。ウンヨンはそう思考を断ち切った。軍人として考えるべき事じゃない。部下が戦果をあげれるようになることは、嬉しいことじゃないか。これからこの子はもっと大変な目に遭うのに、私がこんなんでどうする。

「ウンヨンさん…？」

そんなことを考えていると、自分はどうやら上の空だったらしかっ

た。
「え…ああ、いや、何でもないよ。」
ウンヨンがそう言うと宮藤は小さく頷き、そして話の続きを始めた。
「そしてくしくも2度目の“戦争”は、その日の内に遭遇する事になったんです。」

横須賀基地、臨時野戦病院（ハンガー）
ネウロイに落とされて人事不省の坂本の横に、二人の新米魔女が座り込んでいた。
「うう…クスン…ひっく…」
「泣いててもしょうがないでしょう？博慧ちゃん！」
二人は坂本の教え子で、航空学校の同期だ。
今回が初陣で、二人はそれぞれ一機ずつ撃墜した。が、しかし、尾乃が殺りこぼしたネウロイが放ったビームで坂本が負傷、坂本は人事不省に陥った。
「だって坂本さんが…私がふがいないばっかりに…」
「今土方さんが何とかしてくれるって言ってたでしょう？私たちじゃどうにも出来ないのよ。ほら、スシフト交代の命令がでてるわ、行きましょう？」
「ひっく…ぐすん…うん」
二人がノロノロとシフトの交代に向かおうとしたそのときである。
「長岡さん、尾乃さん！」
土方だ。どうやら帰ってきたらしかった。
「小佐の容態は？」
彼はすこし息を切らせながら、長岡と尾乃に尋ねたので、喜優子は首を横に振った。「そうですか…でももう大丈夫です。」
「何を…」
言っているんです…？そう喜優子が言いかけたとき、背後からすさ

まじい魔力を感じた。
それは、今まで感じたことがない程強大で圧倒的で、なおかつ生の気力で満ち、柔らかな暖かい魔力。
全てを包み込み全てを癒す、力強い魔法の力。
（これは…この感じは…？）
間違いない。会ったことはないけど、扶桑でこんな魔力を持つのはあの人しかいない。
私たちの先輩で、第５０１統合戦闘航空団のメンバーの一人で、８機撃墜のエースパイロット。
いてもたってもいられず、喜優子と博慧が背後に振り返ると…
緑を基調とした皇国海軍第三種軍装に身を包み、その上から白衣を羽織る、宮藤芳佳がそこにいた。

０９　“軍医”宮藤の実力（後書き）

長岡喜優子（ｋｙｕｋｏ　ｎａｇａｏｋａ：ナガオカ　キュウコ）

航空学校出たばかりの新米魔女
周りのことをよく見ることができるしっかり者
イメージモデルは、長野喜一上等飛行兵曹

尾野博慧（ｈａｋｕｅ　ｏｎｏ：オノ　ハクエ）

同じく新米
挙動不審だが他の魔女の技術を一瞬で覚え、自分のものにすることのできる稀有な才能の持ち主。
イメージモデルは、岡野博飛行兵曹長

10　坂本の狼狽

やがて魔力が終息し、治療が終わったと同時に坂本は息を吹き替えした。
「…ここは？」
坂本がそう呟く。
「横須賀基地ですよ、坂本さん。」
宮藤が答えた。
「そうか…私は…確か…ネウロイは！？」
「大丈夫です、あの後ネウロイは一旦南へ引き返しました。」
喜優子が答える。
「…そうか…迷惑かけたな、長岡、尾乃。」
坂本は、何かを考え、そしてこちらを向いてからそう言った。
「そんな…私が殺りこぼしたばっかりに…」
「あれはお前のせいではない。」
坂本は尾乃の言葉をぴしゃりと遮った。
「誰かに何かの責任があるとすれば、それはもうロクに飛ぶことも出来ない身で出撃しておまえたちの足手まといとなった私だ。」
思えば、こんな状態でも後輩の規範であろうとした坂本自身の言葉が、彼女の感情を溢れ出させたのかもしれない。
「…そんな、やめて…やめてくださいよ、坂本さん…」
「いや…私は大人しく教官職を全うすべきだったのだ。もう二度と、前衛で戦うべきでは無かった。こんな身になってなお、私は私情で戦ったんだ。もう一度、もう一度と…」
坂本は、布団をぎりりと握りしめ、吐き捨てるようにそう言った。
まだやれると思っていた…いや、もう駄目だと解っていた筈なのにそんな自分を騙し、教え子の成長をこの目で見るという大義まで作って飛んだことに対する後悔。
そして、その嘘までがらがらと崩れ去ったことによる喪失感や自分

への失望。
それら負の感情がない交ぜになって、坂本を責め立てた。
「思えば私は…扶桑海事変から戦い続けて来た…扶桑海事変からずっと戦い続けてきた私が、過去の栄光を忘れられなくてしがみついていた結果がこれか…こんな、こんな惨めなのが、私の全てか！？私の、この私の生きてきた結果か！！」
息を荒くし、坂本は叫んだ。
もはや坂本にとって過去の栄光は、それすらも自らを責め立てる物でしか無かった。
開戦以来ずっと戦い続けてきた歴戦の魔女は、そこにはいなかった。いつもの豪快で、毅然とした憧れの教官…坂本美緒少佐はそこにはいなかった。
ただ一人、未来に怯える一人の少女が、そこにいた。
「すまんが…一人にしてくれないか…」
「でも…」
「…行きましょう博慧ちゃん」
尾乃が留まろうと声を出す所で、長岡が制す。
宮藤達は、その野戦病院を後にした。

１１　大和田通信所

埼玉県、大和田通信基地

「少尉、お話したい事が」
「ん、どうした。」
古参の曹長が、当直である少尉に、何かを報告しにやってきた。
顔からして良い報告では無いな…少尉はそう思った。
ネウロイとの交戦が開始されてから数日。報告は何処もかしこも景気の悪いものばかりだ。
「ここ一時間ばかり無線に正体不明の高音が混ざっています。」
当直が変わってから１０分と少し。なんで前任の時に報告しないんだ…少尉は心の中で悪態をついた。
勿論そんなことは億尾にもださない。古参の下士官に、この４月やっとこ入った様な士官が刃向かえるもんじゃない。少尉は、この四ヶ月でその事をとくと味わっていた。
それにしても…正体不明の高音？少尉は目の前のヘッドフォンを手に取り、耳に当てる。
「これは…」
「音の高さが不確かですが…何でしょう、これ。」
「システムに異常は？」
「ありません」
「…」
確かに一定では無いが…これは…全体が不協和音で分かりにくいけど何処か心地良いこの旋律は…歌…？
だとしたら何だ？民間放送でも交じったか？…いや、軍用とそれでは全く違うし、そもそもこんな不協和音で歌える歌手など居ない、

もし居たとして、扶桑放送協会が流す筈がない。第一今は音楽放送なんかしていないだろう。
一体何だこの曲は…何処かで聞いた事がある様な…何処だ、一体何処で聞いた？
ぱんっ、と少尉の頭の中で何かが閃いた。
そうだ…！
「「サーニャのうた」だ！」
「は…？」
「オラーシャ空軍リトビャク中尉の「サーニャのうた」！」
「あぁ…」
「まてよ…それをネウロイが歌っているという事は…」
関東全域に渡って電波障害が現れたのは、丁度その時だった。

横須賀基地

「宮藤、ちょっといいか？」
坂本が撃墜されてから数日、髪の結を解き、極うっすらと化粧をして、ズボンを履き、刀を腰に提げて地上任務の戦闘指揮官として現場復帰した坂本が、やっとこ落ち着いた野戦病院の業務の交代で非番の宮藤を呼び止めた。
「あ、坂本さん。お体大丈夫ですか？」
「ああ、お前のおかげですっかりいい。で、なんだがな。」
「はい。」
「先ほど関東全域にわたって電波障害が確認された。それで哨戒飛行を行う事になったんだが…」
そこまで言いかけて言いよどんだ坂本を察して

「…あの二人なんですね。」
と言った。
「…ああ、どうも心配でな。かといってもう私が出て行く訳にはいかない。頼めるか宮藤。」
「大丈夫です。いまはちょうど非番ですし。」
「そうか、まあ敵も小笠原で苦戦している様だし何も出ないとは思うが…本来なら扶桑の絶対防衛圏内で交戦中だ。何が起こるかは分からない。注意してくれ。」
「了解！」

12　ブリーフィング

「ブリーフィングを始める。」
長岡と尾乃が居ることと、白衣を脱いだ宮藤が待機室に入ってきたのを確認し、坂本が言った。
「現在、敵の電波妨害により、関東全域に渡って無線とレーダーが使用不可能な状況にある。これは、昨年ブリタニア上空に出現したネウロイＸ－９出現時の状況下に酷似しているとのことだ。そこで、レーダー、無線施設のジャミング状況を調べた所、栃木県、群馬県の施設の辺りで丁度弧を描くようにジャミングが途切れている事が判明した。」
地図を指しながら、坂本が説明する。
「そこから割り出される位置は…ここだ。敵は既に東京湾に入り込んでいる。一刻も早くレーダーと無線を復旧するため、他の航空隊と連携してこれを叩く。なおこの戦いには過去に同じ状況下で戦闘を行った宮藤にオブザーバーとして飛んでもらう。以上だ、出撃準備！」

「おーい宮藤！」
ブリーフィング後の通路で坂本に呼び止められ、宮藤は立ち止まって振り返った。
「すまんな宮藤、ただのパトロール任務が大規模な任務になってしまった。」
「いいんです。もしネウロイと遭遇したら、私はまだ躊躇ってしまうかもしれませんし…あの、有難うございました。坂本さんですよね、私が表に出ないように配置してくれた人は。」
「ああ、まあお前の“軍医”という肩書きと…今の私の精一杯の力

を利用してな。飛べなくなってこんな事しか出来んが…ああそうだ、お前に渡す物があるんだ。」
そう言うと坂本は、刀袋に入った太刀を取り出した。
「銘刀“九字兼定”、うけとって欲しい。」
「そんな！…私は使えませんし…」
「はっはっは！そう言うと思ったよ。…だが…この刀は元はお前の使い魔の入れ物だったものなんだ。権利はお前にある。どうか持っていて欲しい。」
「はあ…」
「なんだ？その気の無い返事は！ほら出撃だ！急げ！」
「あ、は、はい！」
坂本に怒鳴られ、宮藤は反射的に背筋を伸ばし駆け足になる。鬼教官坂本は健在だ。

通路と格納庫とを走ってそのままの勢いで跳び、戦闘脚の口に足を収納する。
懐かしい魔導エンジンの音とともに豆柴の耳と尻尾が現れ、床に大きな魔方陣が描かれる。
機関銃を持つと自然と武者震いがして、自分の心臓が鼓動を打つ音が聞こえ、宮藤は、耐えようのない快感に自身がうちふるえている事に気づいた。
不謹慎だが、これから飛べると思うと、自然と気分が高揚する。

しかし、これからの飛行が“最悪のフライト”になるとは、この時は誰の想像にもつかなかった。

１２　ブリーフィング（後書き）

九字兼定

基本知識：
室町時代に和泉守藤原兼定（二代兼定、通称「ノサダ」）によって作られたとされる刃渡り７０．５６ｃｍの太刀。
「臨兵闘者皆陣烈在前」と九字に銘が切ってあったことからこの名が付いた。

設定：
宮藤の使い魔「九字兼定」の器だった名刀。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1897l/

オラーシャ奪還（旧版）

2011年6月11日10時44分発行